

きまりは何のために？

「おうい、翔太。待ってくれよ。」

「おはよう。健二くん。昨日は遅くまでありがとう。」

今日は、呉市キャリアアスタートウィークの初日だ。僕は、呉ポートピアパークで、職場体験をすることになっている。呉ポートピアパークは、いつもきれいに掃除がしてあり、楽しく遊ぶことができる公園だ。僕は、このキャリアアスタートウィークをとっても楽しみにしていた。

そして、今朝、友達との待ち合わせ場所に行くために、自転車で乗って家を出た時のことだった。呉の職場に向かう健二と出会ったのだ。

昨日、僕は健二と一緒に夏休みの宿題をしていた。今日から始まるキャリアアスタートウィークに備えて、宿題を早く終わらせて家に帰るつもりだったが、健二がいつまでも宿題を教えてくれるのをいいことに、ついつい長引いてしまい、帰りが遅くなってしまった。健二は僕が帰った後、自分の宿題をして、寝るのが遅くなってしまったらしい。

翔太。寝過ぎて電車で遅れそうなんだ。自転車の後ろに乗せて、駅まで連れて行ってくれよ。頼む。」

「でも……。」

「いいじゃないか。駅はすぐそこだし。翔太も急げば間に合うよ。」

ぼくの頭に、近所の自転車屋のおじさんの言葉が浮かんできた。僕の自転車はいつもそのおじさんに整備をしてもらっている。タイヤの空気を入れてもらったり、チェーンを直してもらったり、小学生のときからずっとお世話になっている。以前、自転車の修理をもらったときに、おじさんはこんなことを話してくれた。

自転車はの、一人で乗るように作られとるんよ。ブレーキもタイヤもそういう設計になっとるんよ。じゃけん、二人乗りをしよったら危ないぞ。何かあったら大げがになる。気い付けよ。」

僕はどうしようかと迷った。そして、健二に言った。

「うん……。分かった……。」

僕は、健二を自転車の後ろに乗せて、急いで天応駅に向かった。



駅に行く細い道で、小さな女の子を連れた近所のおばさんとすれ違った。僕たちは急いでいたので、スピードを落とさずそのまま通り過ぎようとした。おばさんは、「危ない」とばかりに女の子をかばおうとした。その時のおばさんの表情を、今でも忘れることができない。しかし、僕はそのまま先を急いでいた。

しばらく行くと、道が下り坂になった。スピードが上がる。もう少しで駅に着く。間に合いそうだ。僕は急いだ。

その時だ。カーブを曲がろうとしたときに、下から車が上がってきたのだ。危ない。」

僕はおもわず急ブレーキをかけた。そして、バランスを崩し、そのまま電柱にぶつかった。

痛い。」

おなかに激痛が走った。僕はおなかを押さえた。うずくまったまま動くことができない。健二を見ると、足首を手で押さえている。倒れたときに足をひねったらしい。顔をしかめて痛みをこらえている。

僕も健二もそこから動くことができなかった。近くを通った人が、僕たちの様子を見て病院まで連れて行ってくれた。

健二はねんぎの手当してもらい、僕は治療のため入院しなければならなかった。お母さんは、仕事を休んで病院にかけつけてくれた。

結局僕たちは、楽しみになっていた職場体験に行くことができなくなった。

病院には、友達や先生もお見舞いに来てくれた。一緒に呉ポートピアパークで職場体験をすることになっていた友だちから、職場の人が僕のためにいろんな準備をしてくれていたことや心配してくれていたことを聞いた。

そして、痛みが取れて落ち着いた頃、ふと、自転車屋のおじさんの言葉を思い出した。

